

平成31年度(2019年度)県立並木中等教育学校自己評価表

目指す学校像	1 様々な体験を通して広く人間教育を行う学校 2 筑波研究学園都市の一角に位置するという地域性を生かし、大学や研究機関と連携して科学教育を行う学校 3 外国からの研究者・留学生との交流や海外語学研修などを通して、国際教育を行う学校			
昨年度の成果と課題		重点項目	重点目標	達成状況
平成30年度は開校11年目となり、「より高い教育水準・より豊かな教育活動をめざして」をテーマとする第2ステージへ入った。 アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践により、生徒が学習活動の中で、考えを表現しあったり、納得解を求めて議論したりすることが増えた。またR80による「振り返り」と「再構築」をさせることにより、生徒の論理的な思考が深まり、表現力が高まってきている。 SSH指定第2期の柱となる理数探究のカリキュラムが充実し、生徒が学びを深める場が授業の中に設けられている。また、サイエンスカフェをはじめとする外部からの講師を招いた課外活動についても、生徒の関心を掻き立てている。これらの場の提供が、生徒の学びに向かう姿勢を改善していることは疑いのないところだ。科学分野をはじめとするの各種コンクール等において優秀な成績を上げる生徒がでたことも、その成果の一部であると考えている。 中等教育学校の特性を生かすためのカリキュラム・マネジメントを行い、6年間を見通した校内体制の整備を進めていきたい。「グランドデザイン2019」については、2019年3月1日に完成している。 また、人間教育の充実についても、課題として留意していきたい事項である。生徒の人権を大切にしたい丁寧な指導を心がけていきたい。		1 意欲ある学校風土の醸成	○新しい時代に必要となる資質・能力を育成する。 □「アクティブ・ラーニング」の推進により「論理力」「日本語の4技能」を育てる。 □ICTの効果的活用を工夫し、生徒の思考力・判断力・表現力等の能力を育てる。 □縦割り活動を通して、生徒が協働して学ぶ態度やリーダーシップを育てる。	A
		2 志を高く持ち、進路実現に向かう生徒の育成	○体験活動を充実し、6年間を見通した体系的なキャリア教育を展開する。 ○生徒が自らの可能性に挑戦する進学指導を実践する。 ○キャリアカウンセリングを通して、生徒の目標の明確化と支援のできる相談を行う。	A
		3 SSH事業第2期目の推進	○学校設定科目「理数探究」を中心としたカリキュラムの一層の充実を図る。 ○地域連携、高大連携による探究力・論理力の育成を図る。	A
		4 6年間を見通した校内体制の確立	○6年間の教育活動の体系化を図り、内容を精選する。 ○カリキュラム・マネジメントにより教育活動を精選し、校内体制を確立する。 ○医学コース開設（令和2年度）へ向けたカリキュラム編成を実施する。	A

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
1 校務運営部 (教務)	SSH2期目の展開と次期学習指導要領を念頭に置いた教育課程編成、授業時間の確保と行事の調整を行い、学校としての体制を確立する。	SSH関連の講演会等を総合的な学習の時間に位置づける等、年間を見通した計画的な授業時間確保を行うため、学校行事や年次行事の調整を行う。	A	A	生徒の多様な学びのための行事の精選と、授業時間の確保を継続
		「理数探究」の授業を効果的に運営するための行事・日課等の計画や調整を行う。	A		「理数探究」における中間発表会、成果報告会を踏まえた授業時間数の確保
		SSH2期目の目的を達成するため、教育課程全般を見直し、学校設定科目の新設・改良を十分検討し、学校としての方針を踏まえた体系的なカリキュラム開発を推進する。	A		学校設定科目と医学コース設立を踏まえた、体系的なカリキュラム開発
	行事の精選と授業時間の確保に努め、生徒の可能性を引き出す質の高い授業が展開できるような学習環境・システムを整備する。	計画的な運用により現行のA週B週C日課システムの利点を最大限に活かし、授業時間の偏りを減らすための曜日変更や行事の調整を行い、バランスのとれた学習進度を維持する。	A	A	A, B, Cパターンによる年間を見通した時間割構成を行い、バランスのとれた授業時間の確保を継続
		教務として授業変更を管理し、授業振替を継続して推進する。1時間の授業にこだわることで、生徒・職員ともに「授業を大切にする」意識の徹底を図る。	A		非常勤講師への連絡体制の徹底による、突発的な授業変更への対応
		定期・実力テストの在り方を検討していく。各教科・年次からの要望も取り入れ、結果が効果的に生徒に還元され、授業で培った力がより正しく評価されていくように、テストの在り方や内容を十分検討していく。	A		部活動の対外試合による公欠者の増加への対応
	カリキュラム・マネジメントにより、アクティブラーナーを育成するための6年間を見通した校内体制の充実を図る。	アクティブ・ラーニングやICTの活用を取り入れたシラバスを作成し、生徒のアクティブラーナーとしての自覚を高め、意欲を持った学習計画の立案を促す。	A	A	アクティブラーナー育成のための、計画的かつ創意工夫ある授業計画の立案
		観点別学習状況評価について理解を深め、生徒個々の学習方法のチェックに還元できる評価方法を研究する。大学入学共通テストに関する情報収集、共有に努め、授業への反映を図る。	A		後期課程における要録及び通知票の観点別学習状況評価表記への対応
		保護者や地域に対するアンケートを実施し、学校外からの意見も取り入れていく。	A		アンケートでのマイナス評価項目への改善策構築
		医学コースが開設されるのでその運営等について生徒視線にたって検討していく。	A		医学コースの開設にあたり、運営方法や内容の吟味
(総務)	本校の目指す生徒像及び教育活動の活性化を念頭に置いた選抜を行う。	入学者選抜内規を検討する。	A	A	本校の求める生徒像を反映した、より適正に評価できる内規の改善を継続
		効率的かつ正確な入試事務処理が行えるよう運営計画の工夫改善を図る。学校委員会担当者の負担軽減と業務の細分化を図る。	A		学校委員の負担軽減とヒューマンエラー発生への的確な対処を継続
	多様な手段により、本校教育活動についての広報活動をより一層充実させる。	生徒が主体となり生徒目線での学校説明会を企画する。日頃のアクティブ・ラーニングの実践や研究を生かした学校公開等の企画・立案を検討する。	A		本校の特徴を発信するとともに、生徒主体の発表を中心とした説明会を継続
		生徒の躍動感をアピールする学校案内パンフレットやリーフレットを作成する。	A		生徒の活躍する写真を多数掲載し、躍動感あふれるパンフレットやリーフレットの作成
		直感的でわかりやすいHPの構成やデザインを検討するとともに、本校の教育活動を外部に発信するツールとして積極的にHP(並木ブログ)の更新を図っていく。	A		生徒の活躍に関する情報を積極的に発信していくための更新を継続(並木ブログ)
	儀式的行事を円滑に運営する。	始業式、終業式、入学式、卒業証書授与式、修了式等の企画・運営を円滑に行う。	A		生徒の参加意欲を高める企画・運営の継続
		校内の放送機器等の整備拡充を行う。	B		映像を伴う放送集会の企画立案と、老朽化した機器の更新

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
(渉外)	渉外活動の充実と会員同士の親睦を図る。	PTA総会、本部役員会及び合同役員会を企画・運営する。	A	A	計画的な運営による、参加者数の維持
		県高P連及び県西高P連との連携・協力を図る。	A		他校との設置な情報交換による連携継続
		年次委員会、広報委員会、研修委員会、生徒指導委員会、支部会を開催する。	A		機能的な組織運営のための情報共有を継続
		かえで祭(文化祭)、ウォークラリー等、学校行事への保護者の参加協力を積極的に呼びかける。	A		案内の周知による、参加者数の維持
2 企画研究部	6年間を見通した「理数探究」の指導体制の確立を図る。	生徒一人一人の理数探究の充実、及び指導する教員の指導力の向上を図り、年間を通して「理数探究」の授業の充実を図り、6年間を見通した「理数探究」の指導体制の確立を図る。	A	A	医学ゼミとの関係で理数探究ゼミ配属の教員数の検討が必要
	SSH事業第2期目の推進	中高一貫教育を活かした探究力・論理力を育成するカリキュラムの開発と教材・指導法の実践的研究の充実を図る。	A		「探究力・論理力が向上した」と評価できる調査法の構築
	県内初のユネスコスクールとして国際理解教育の充実を図る。	ユネスコスクールとして日々の授業や様々な国際的な体験を通じて次代の日本・世界の発展を担う「人間力」を備えたグローバルリーダー育成を図る。	A		本校から派遣可能な各種留学について3年次生徒・保護者に対して説明会が必要である
(探究)	・理数探究・課題探究Ⅲの運営方法を改善発展 ・前期課程ミニ課題探究の運営方法の系統化	① 理数探究Ⅰ、Ⅱ・Ⅲのカリキュラム開発を行う。	A	A	ゼミ活動のファシリテーション(生徒同士の相互作用)のさらなる進化
		② 探究ノートの開発を行う。	A		現状に合わせて改訂を行う
		③ 前期課程ミニ課題探究のカリキュラム開発を行う。ミニ課題探究の運営方法を系統化し、6年間の一貫した理数探究指導体制を確立する。	A		ミニ課題探究の系統化をさらに進める
(SSH)	・SSH第2期の中間評価に向けての、研究開発課題に対する実践的な取組と評価 ・探究力、論理力を育成するカリキュラム開発 ・地域連携・高大連携による探究力・論理力育成システムの構築	① 先生方の協力の下、探究力・論理力を育成するカリキュラム開発を行う。(理数探究基礎、理数探究、論理国語、SS理科学科、数理科学A・B)	A	A	学校設定科目以外の授業でも探究力・論理力を高める指導方法について検討する。
		② 地域連携、高大連携による探究力、論理力育成システムを構築する。(つくばサイエンスフロント、社会問題ミーティング、CSTレーニング)	A		地域連携により、探究力・論理力をどのように向上していけるのかを再度検討する。
		③ 科学技術系人材育成を図る。(医学ゼミ、科学研究部、科学の甲子園およびジュニア、科学オリンピックの活動支援)	A		科学技術系人材育成の裾野を広げる取組について検討する。
		④ 他校への普及活動に力を入れる。(授業公開、成果報告会、SSH通信)	B		SSH通信の発行回数を増やすとともに、H28年度で止まっているWebサイトへの掲載を再開する。
		⑤ 事業の分析・評価を行う。	B		各事業に対する効果を検証する調査の実施・検討を行う。
(SGS)	・国際教育・国際交流など特色ある学校づくりの取組 ・県内唯一の公立学校ユネスコスクールとしてESD教育への積極的な取組と普及	① SSH事業とリンクをさせた国際理解教育を充実させる。例:英語科と他教科のクロスカリキュラム実施やICT活用、アクティブ・ラーニング等	A	A	JSTからの依頼で「さくらサイエンスプラン」による中国人高校生を2年連続で受け入れたが負担が大きいため来年度は見送りたい。
		② キャリア教育の視点や、外部機関(JICA・土木研究所・産業技術総合研究所・企業等)との連携を踏まえて、各年次に最もふさわしい国際教育に関わる行事を選択し、当該年次に提示する	B		年度途中で始まったニュージーランド長期留学生派遣事業が見切り発車で始まり膠着状態である。予算・人員配置等早急な事業見直しが求められる。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
3 学校生活部 (生徒指導部)	基本的生活習慣を育成し, 他人との協調性を養い, 自己実現を目指す。	全職員の共通理解と指導を徹底する。	A	A	全職員の共通理解と6年間一貫指導。
		自主的に「挨拶をする・装を正す・時間を守る」が出来るよう努める。	A		上級生が下級生の見本・手本になるよう自覚化。
		マナーアップ活動を通して, 校則を遵守する態度の育成を目指す。	A		継続的かつ計画的に活動の促進。
	保護者・関係諸機関との連携を密にし, 問題行動の未然防止を目指す。	保護者との連携・協力を密にする。	A		より保護者との連携を密にして, 家庭との協力による事故の未然防止。
		各中学校・警察等の関係諸機関との連携・協力を図る。	A		学校と警察の連絡制度の活用及び連携。並木交番への行事への協力要請。
		生徒事故の未然防止に努める。	A		日常から生徒の行動を観察し, 小さな変化にも対応して更に未然防止を図る。
	安全教育の推進を図り, 自己防衛意識・自己管理の育成を目指す。	登下校時の立哨指導・巡回指導を計画的に実施する。	A		特に雨天時の登校時指導を継続的に実施し交通安全, 事故未然防止。つくば・荒川沖駅の立哨指導を計画的に実施。
		交通安全教育の徹底を図る。	A		定期的に講習会を開催し交通安全の意識を高揚。特に自転車の安全運転指導も実技を交えて実施。
		定期的に自転車点検を実施する。	A		今後業者とも連携して定期的に実施。
(教育相談)	心の問題を抱えている生徒の早期発見と早期対応を図る。	年次と情報を共有し, 休みがちな生徒に対して, チーム支援の充実を図る。	A	A	カウンセリングの件数が多い。週に4枠では, 6学年が在籍する本校の需要に対応しきれっていない。 前期課程で不登校傾向を呈する生徒が多くいる。様々な要因を抱えており, 年次担当・保健室・スクールカウンセラーが連携して対応している。
		校内研修会を実施し, 不登校マニュアルや相談室便りを発行する。	A		
	年次・保護者との連携強化を図る。	生徒へのアプローチについて教育相談的視点からのアドバイスをする。	A		
		保護者との連携を密にする。また場合によっては医療機関等の紹介をする。	A		
	スクールカウンセラー(SC)の積極的活用を図る。	カウンセリングを受ける生徒に対して, 学校生活の中で支援を図る。	A		
		カウンセリングにおいて, SCと年次・担任等の間の連絡調整を支援する。	A		
(保健安全)	生徒の健康・安全・健康教育の推進に努める。	健康診断は校医と相談し, 合理的且つ円滑に行い, 要治療者については早期治療を徹底する。	A		・教員向けの防災研修を検討する
		日常的な保健室利用生徒について, 年次・担任・保護者との緊密な連携を図る。	A		
	校舎内外の美化と安全を図る。	年次縦割りの清掃班による清掃活動の充実化を図る。	A		
		ワックスがけおよび清掃強化週間を実施し, 校内の美化に努める。	A		
		危険箇所の点検を行ない, 改善・修繕に努力する。	A		
		災害時等の対応マニュアルの見直しを行い, 全職員に周知徹底する。	B		
		避難訓練を年2回実施する。訓練に際しては, 地域との連携を図る。	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
(食育)	正しい食事のあり方や望ましい食習慣を身につけ、食に感謝し、楽しく食事ができるようにする。	全職員の共通理解のもと、安全と食育指導上、適切な指示をしながら給食指導を行う。	A	A	偏食・小食の生徒への継続的な指導。
		給食係や給食委員会による常時活動の活性化を図り、給食の円滑な配膳や片付けを行えるようにする。	A		給食係や給食委員会による常時活動の活性化と衛生面の指導の徹底。
		職員も教室で生徒とともに一緒に給食を食べながら、適宜、食事のマナーの指導、栄養や食文化の理解、望ましい人間関係の育成を図る。	A		食給食指導を通して、食事のマナーの指導の徹底。
4 特別活動部	部活動の活発化	中等前期・後期課程の生徒を含めた中高6年間一貫の活動方法を、前年度に引き続き模索する。	B	A	前期課程、後期課程での合同練習を実施している部活動もあるが、ルールや場所の問題が障壁になっている。
		部活動における質の高い活動を推進し、個の育成と集団のレベルアップを図る。	B		活動時間が短いため引き続き、質の高い活動方法を模索する。
		部顧問の適切な配置を考え、学校全体としての指導体制をより充実させる。	A		主顧問と副顧問の連携を充実させる。
	主体性のある生徒会活動の推進	生徒会役員が、主体性を持って生徒会活動を進められるようにする。	B		定期的に生徒会を開き、一般生徒からの意見をまめ、精査する。
		中等前期・後期課程の生徒を含めた生徒会活動のあり方を、前年度に引き続き模索する。	A		縦割りの生徒会活動を充実させるための方策を模索する。
		生徒会役員選挙に多くの候補者が立候補するよう生徒の意識を高揚させる。	A		各年次担任にも協力を要請し、意識の高揚を図る。
	学校行事の活性化	かえで祭の実行委員を適正数にし、生徒による質の高い企画・運営力の向上を目指す。	B		例年実行委員が多すぎて潤滑な活動に支障を来すため、来年度も適性数を考えた方がよい。
		前期・後期課程の生徒が一体化したかえで祭を作り出す。	A		各年次の特色を活かし、より一層、充実したかえで祭を作り上げる。
		前期・後期課程の生徒が主体的に企画運営し、スポーツデイを成功に導く。	A		より生徒主体で実施できるように来年度も計画する。
		WRの実行委員を増やし、生徒による企画・運営力の向上をめざす。	A		道路事情の変化により危険な箇所も増えているので、実行委員の安全意識を向上させる。
	ウォークラリー(WR)を通した心身の健全な育成と集団意識の高揚	体育授業での歩行練習で規範意識や生徒の体力の増進に努める。	A		WR本番の天候や道路事情を考えた歩行練習、規範意識の高揚を図る。
		生徒自ら集団歩行・行動の大切さを身につけ、お互い協力して歩行できるよう促す。	A		安全意識を高め、お互いに注意し合えるような、意識の高揚を図る。
		上級生から下級生まで全校生徒が一つになり行事の成功に向かうよう働きかける。	A		後期課程の規範意識を引き締め、安全で一体感のあるWRを作り上げる。
5 学習進路部 (進路指導)	6年間を見通したキャリア教育を促進し、生徒が可能性に挑戦する進学指導を実践する。	年次に合わせて進路行事の体験を通して職業観や進路意識を高める。	A	A	6年間を見通したつながりある進路・キャリア学習を意識したい。
		進路だより・進学要覧を改訂し、ガイダンスとあわせて、生徒への啓発と保護者への情報提供を拡充する。	A		いつ、どのようなガイダンスが必要なのかを次年度にもつなげられるようにする。
		個人面談の充実により生徒に高い志と進路目標を持たせ、学習時間の向上を図る。後期課程では土曜学習会を実施する。	A		土曜学習会のあり方、待遇の改善を検討したい。
		模試学力分析会・進路研修会・学習状況調査により生徒情報を共有し、面談力の向上を図る。	A		定期的な分析会の開催を促し、充実させる。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
(授業研究)	教員の学習指導力のレベルアップを図る。	毎月の授業参観(ちよつと見週間)を実施する。ちよつと見に連動してアクティブ・ラーニングやICT, TO授業をとりいれた授業公開を実施する。	A	A	ちよつと見週間をより良い姿に改善し, 利用しやすくする。
		教師向け研修会・外部教員研修参加の促進により学習指導力の向上を目指す。	A		回数上限を変更するなど, 成果をあげた。
(学習環境)	学習環境を整備する。	ブライトホールの整備を進め, 利用を促進する。	A		更なる利用しやすい施設にする工夫を考える。
		進路指導室の整備を進め, 利用を促進する。	A		生徒・先生への認知度をアップさせたい。
(図書館運営)		赤本の充実を図る。	A		使用後の古本を回収し, ブライトホールの赤本を充実させたい。
		図書館運営を充実させる。	A		6年生の利用が増えた。前期生とのすみわけを工夫したい。
6 PCシステム	IT機器を整備する。(特にハード面)	教室, 特別教室等のPCリース更新(2019)をスムーズに行う。	A	A	リースは今夏に延期になった。
		ネットワークの整備を計画する。今年度はPC室・ブライトホールについても, 無線のネットワーク敷設を検討する。	A		ChromeBookの事業等、ネットワークの管理をより充実させる
		今年度でWindows7のMicrosoftからの公式サポートが切れる。セキュリティ面の安全を考えて, 校内からWindows7のPCを, 更新によりゼロにすることを目標とする。	A		Windows7のPCは校務用においてはゼロになった。
	ホームページの再構築	年数を重ねて, 無計画に肥大したホームページの構成を見直す。管理職, 広報担当の教職員と内容や構成について検討し, どの情報を誰が知りたいのかを整理する。	B		未だ、混沌としている。広報・進路・教務と調整が必要
7 学校事務	教育環境及び生徒の学校生活環境の充実	授業研究が円滑に行われる様, 必要な設備・備品を整える。	C	C	事務手続き上迅速さにかけるため, 緊急に必要な物品等購入には対応しきれないところがある。
		生徒が安全安心して学校生活を送るため, 環境美化を含めた学校施設の整備に努める。特に施設の老朽化により不具合ある施設設備については, 早急に対応する。			老朽化設備については, 工事等
8 1年次	学習習慣を確立し, 意欲的に学習に取り組む生徒の育成	「わかる授業」「楽しい授業」を心がけるとともに生徒の実態に合った学習指導を行う。	B	B	生徒の関心・意欲を引き出す指導の在り方。
		適切な量の課題を出すとともに, 学習に困難を感じる生徒に対して, 丁寧な指導を行う。	A		個に応じた学習指導の充実。
	集団生活を大切に, 他者を思いやる豊かな心をもった生徒の育成	きちんとした返事やあいさつができ, お互いに声をかけ活動できるような集団づくりを心がける生活指導を行う。	B		定期的な指導・声かけ。すべての教員での共通理解。
		学級活動や道徳の授業を通して, 主体性と思いやりの心をもつとともに, 困難にも立ち向かう強い心を育てる。	B		日常生活との関連付けと継続した指導。
	「問い」につながる「疑問」をもち, 探究心をもった生徒の育成	R80を活用し, 振り返りを大切にするとともに, 身近なことに疑問をもち, 興味関心を広げる態度を育成する。	A		発問の仕方。課題の提示。
		アクティブラーニングを取り入れ, 多角的にものごとを見る視野がもてるように指導する。	B		相手の話を聞く姿勢の育成

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
9 2年次	各個の実態を見極め、「基礎からの発展」と「基礎の補強」に対応する、柔軟な学習指導の充実	学習意欲を継続するための授業展開の工夫に努めると共に、学習意欲の減退した生徒に対する具体的で連携的な指導を実施する。	B	A	計画的な学習方法について、生徒と検討・協議しながら進めていく機会を増やす。
		自身の進路の枠組みや方向性を意識し、夢をもって生活するための生きたキャリア教育を推進する。	A		職場「見学」と同じにならないよう、「体験」を意識した事業所選定に心がける。
	道徳的な価値観を育成し、集団生活の秩序や礼儀作法について自ら考え、行動することのできる指導・カリキュラムの充実	時と場にふさわしい挨拶が自然にできる雰囲気を作り、よりよい人間関係を構築すると共に、後輩の手本となる基本的生活習慣の確立に努める。	B		自主的に、元氣よく挨拶ができるよう、具体的な時と場についての指導を行う。
		天真爛漫さを生かし、謹厳実直さを賞讃しながら、いけないことに関しては毅然と指導するメリハリの利いた生活指導の充実を図る。	A		担任と副担任の指導の役割や分担を明確にし、多角的に生徒を指導できる年次経営に努める。
		道徳の時間を通して、集団生活の在り方の思考と自己肯定感の育成を計画的に実施する。	A		授業時数を計画的に累計しながら、各時間の目標(価値)を明確にして生徒の感情をゆさぶる授業展開を工夫する。
	これまでの経験を生かして後輩を先達し、部活動や課外活動に目的と責任をもって取り組む、心身共にたくましい人間づくりの充実	放課後の時間の生徒の動きを明確化すると共に、自ら計画性をもって諸活動に自主的に取り組むことのできる生徒の育成に努める。	A		学べる場、学べる雰囲気を継続的に提供できる計画を立案する。
		教育相談の充実に努め、定期的な面談・懇談に加えて日々の雑談も大切にして、学校生活へのエネルギーを一人一人が蓄積できるようにする。	B		生徒に接する機会を絶対的に多くし、各個の思いに寄り添った教育相談が実現するよう努める。
10 3年次	「論理力」など21世紀型能力をもった生徒を育成する。	ALを通して、自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりする場面を多く設定し、自ら考え積極的に生徒が活動できる授業を積極的に行う。	A	A	生徒はALに積極的に参加し、他の意見を吸収していくスタンスが構築できたので、考え方や論理力を高めるためのテーマ設定を工夫していく。
		総合的な学習の時間や年次行事において、ICTを積極的に活用したり、効果的活用を工夫したりして、生徒の思考力・判断力・表現力等の能力を育てる。	A		生徒はICT活用力に長けている。生徒の思考力や判断力を高めていくための授業構成や活用法を教員側が研修する必要がある。
	急速に変化している日本や世界に役に立とうとする強い使命感をもった生徒を育成する。	進路指導、大学見学、広島京都平和研修、講演会などの体験活動を充実させ、4年後を見通した発達段階にあったキャリア教育を展開する。	A		講演会や体験活動によって、自分の将来や日本・世界の未来について考える機会が多かった。これらの年次行事は継続していきたい。
		様々な活動に実行委員を立ち上げ、生徒企画・運営の活動を多くすることで、人の役に立つ経験をさせ、主体性、計画性、実践力を育てる。	A		実行委員の活躍により、生徒の指示待ちではなく、自分たちで行事等を創り上げる力がついた。ただ、そこまでの力を付けるには3年次においてはまだ手をしっかり入れる必要がある。
	前期課程最高年次として、当たり前のことが当たり前のできる生徒の育成	元氣な挨拶のできるように日頃から指導を行う。さらに学校の決まりや、公共のマナーなどに対する意識を高める声かけを行い、実践・振り返りをする活動を取り入れる。	B		自分から元氣なあいさつができるよう、日常的に声をかけてきたが、残念ながら課題が残る。社会に出て一番大事なことは挨拶なので、学校全体で力をいれていくべきところだと考える。
		計画性への意識を高め、実践できる生徒を育成するために、フォーサイト手帳を有効活用する方法を指導し、支援を行う。	A		フォーサイト手帳は自己管理能力、自制心を養うのに大変効果的なものである。後期生になっても継続して活用していきたい。
	感謝の心もち、仲間と切磋琢磨できる生徒の育成	AL授業や道徳、学活の充実を図り、仲間がいるからこそ得られる新たな考え方や視野を広げ、自分を成長させてくれる仲間への感謝の気持ちをもてる生徒を育成する。	A		年次職員でローテーションして道徳の教材を提案したり、生徒が学級活動のテーマを考える場も設けたりしながら、その時々必然性をもてるテーマで活動し、仲間への感謝の気持ちを膨らませることができた。
		前期課程最高年次として、部活動の中心的な立場としての意識を高めさせ、積極的な参加を促す。	A		部活動に熱心に取り組む生徒が多いが、前期後期の切り替えて転部する生徒もあり、部活動への向き合い方なども含めて教育相談を実施した。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
11 4年次	基本的生活習慣の育成	挨拶を励行し、服装指導、清掃指導を徹底する。	B	A	一部に服装の乱れが見られる。指導の徹底を図る。
		基本的生活習慣を身につけさせ、遅刻をさせないとともに、話をしっかりと聞く態度を養う。	A		現状の指導を継続する。
		長欠生徒、問題生徒に、年次教員全体で善後策を講じることで、問題解決に努める。	A		年次が進むにつれ、不登校生徒が増加する傾向にあるため、管理職や養護教諭といっそうの連携を図る。
		道徳の授業を年次職員がローテーションして行うことで、心を多面的に養う。	A		現状の指導を継続する。
		ICTを活用し、情報の共有を図ることで、利他的に行動できる生徒を育成し、志の高い集団形成を図る。	A		現状の指導を継続する。
	学習の習慣化と基礎学力の育成	現5年次の取り組みを参考にしながら、大学共通テストへの対応を念頭に、思考力を高める授業スタイルを積極的に導入し、応用・発展へと広がりのある授業を展開する。国公立大学の二次試験に対応できる論理性・表現力を育成する。	A		現状の継続とともに、文科省の決定に沿った準備をしていく必要がある。
		朝の小テスト、週末課題、模試等の実施による学習の習慣化および学力向上を図る。	A		現状の指導を継続する。
		学習時間の記録や保護者との情報の共有にICTを活用し、集団としての学力向上を図る。	A		現状の指導を継続する。
		進路講演会、大学見学会、卒業生との学習相談会等により、自己理解と進路意識の向上を図る。	A		現状の指導を継続する。
	自己理解と進路意識の高揚	大学見学会等で適宜情報を与えることで、文理選択や難関大学への進学を早期に意識させる。また、LHR、総合的な学習の時間等を活用して、生徒全体かつ個々に対して進学に関するアドバイスや情報提供に努める。	A		現状の指導を継続する。
		蛭雪時代等の進路情報誌の興味関心を高め、自ら情報を収集する生徒を育成する。	B		生徒への進路情報誌の提示の仕方を工夫する必要がある。
12 5年次	規律ある基本的生活習慣の育成	家庭との連携を密にして、問題の発生を未然に防ぐ生活指導を徹底する。	A	A	次年度も継続
		生徒との面談を繰り返すことによって生徒理解や生徒の心の悩みを把握する。	A		次年度も継続
	生徒間、生徒と教員間の集団としての信頼関係の形成	発展期を迎え、クラスの団結と仲間意識の向上のためLHR活動を充実させる。	A		次年度も継続
		生徒との面談を年次職員全員で取り組むことによって一層の生徒理解を図る。	A		次年度も継続
	学習習慣と基礎学力の育成	「家庭学習の記録」表などを導入することによって家庭学習時間を確保する。	A		次年度も継続
		授業中心に心がけるとともに、課外等を通して進路別の学力育成を目指す。	A		次年度も継続
	異文化理解と自己理解について考察を深める生徒の育成	ベトナムへの修学旅行をとおして、異文化理解および異文化から自国の文化を再確認する。	A		生徒の振り返りからも有意義な修学旅行となった。
		最終年次に向けて、大学模擬授業や進路講演会をとおして自己理解を深め、進路意識の向上を図る。	A		。生徒の希望する進路実現をめざす

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
13 6年次	規律と活力ある基本的生活習慣の完成	遅刻指導を継続することで、早めの登校時間を習慣づけ、学校生活にリズム感を持たせる。	A	A	センター試験後に、遅刻する生徒が増えた点が課題である。
		生活記録表の記入と提出を継続することで、生徒の状況理解を図り、生徒動向の把握に努める。	A		アプリを利用した学習記録をする生徒が増えた。
	生徒間、生徒と教師間の信頼感を醸成し、集団としての凝集性を高める	主体的な学習集団を目指し、セルフスタディスペースやブライトホールの活用を促し、お互いに切磋琢磨する雰囲気の醸成に努める。	A		ブライトホールの利用改善を継続したい。
		担任面談・副担任面談・年次主任面談を継続して行い、生徒と教員間の意思疎通を密にし、生徒をタイミングよく支える体制を作る。また、面談情報の共有を図る。	A		生徒の把握に努めることができた。
	志高い進路意識の維持による進路実現	学年集会や進路講演会での講話をととして、生徒の第一志望への意欲を維持させる。また、チーム並木として、集団で受験に向かう環境を作る。	A		受験に対して集団として向かうことができた。
		LHRや総合的な学習の時間においては、将来への目標確認を行うことで、自らのキャリア観を意識させ、課外学習においては、質の高い学力の向上を図る。	A		課外授業の充実を図れた。
	最上級生としての自覚により、下級生に範を垂れる	年度前半の学校行事や部活動に悔いなく取り組ませることで、最上級生としてのリーダーシップを発揮させる。	A		リーダーシップを発揮し大いに活躍した。
		縦割り活動をととして、最上級生としての振る舞いを自覚させることで、並木中等の学風をつくる覚悟を促す。	A		先輩から後輩へ受け継がれる意識を徹底させたい。
14 国語科	基本的な学習習慣の定着	学習ガイダンスを重視し、こまめに行うことで、学習の見通しを持たせ、計画的に学習しようとする態度を育てると共に、予習・復習の学習習慣を身につけさせる。	B	A	学習ガイダンスを年度始めだけでなく、試験前や行事後等、効果的に行う必要がある。
		単元ごとに明確な到達目標を提示し、段階に合わせた授業計画と評価計画を提示する。	B		
	読解指導の深化	論理的文章・文学的文章の読解法について解説する中で、芸術論や科学論等幅広い分野の文章を客観的に読解できる力を育成する。	A		TO学習での異学年間の交流は生徒の意欲向上につながるため、今後も実施していきたい。
		AI型授業展開をすることにより、他者との関わりの中での学び合いの機会を設けることで、読解力の向上を目指す。	A		
	「書くこと」の指導の徹底	「読むこと」や「聞くこと」と関連させながら、ノート指導を基本とし、書くことを通して思考をまとめる方法を学ばせるようにする。	A		発達段階に合わせた指導をしていく必要がある。
		各年次に合わせた添削指導を行うことにより、論理的文章表現力の向上を図る。	A		
	「聞く」態度の育成と適切な話し方の指導	正しく内容を理解するために、状況に応じて「聞く」、「聴く」、「訊く」の3種類の「きく」を使い分けられる生徒を育てる。メモを活用した聞き方についても指導を行う。	A		発達段階に合わせた指導をしていく必要がある。
		場と内容に応じ、聞き手を意識した「話し方」を工夫しようとする態度を育てる。	A		
	研修機会の充実	研修会等に積極的に参加して、授業作りの参考になる情報を集めて活用する。	A		5, 6年次の難関大課外や添削指導を他の学年の教員も協力して行うことで、受験指導のあり方を共有していく必要がある。
		定期的な教科会を開くと共に、互見授業を行うことで年次進行に合わせた授業法の研究を行い、新たな指導法の構築を図る。	A		
		他教科の授業を積極的に参観し、指導法の工夫を取り入れる。	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
15 社会科	6年間を見通した教科指導体制を構築すると共に、各時期において身につけるべき能力を明確に定めて授業実践を行う。	シラバスを活用し、観点別学習状況評価を円滑に実施すると共に、各年次での学習目標を明確に提示した上で実践を行う。	A	A	学習目標の見直し
		生徒の発達段階に応じた学習内容と方法を検討し、実践に生かす。 ・基礎期(中1～2) 学習内容を精選し、言語活動を積極的に導入する。 ・充実期(中3～4) 効果的な先取り学習や教科横断型授業の研究を進める。 ・発展期(中5～6) 進路実現に必要な学力を養成する。 多様な進路希望に対応できる科目選択の在り方を研究する。	A		基礎期～充実期において、発展期の学習内容との関連をより意識した実践を行うとともに、発達段階に応じた前期生ならではの取組を充実させる。
	生徒主体の授業の展開を常に意識し、学習意欲を喚起するための指導法の工夫と改善を図る。	「アクティブ・ラーニング」を積極的に取り入れた授業を実践する。 ・教科会での話し合いを生かしながら能動的な学習につなげられるような学習課題や発問の開発を継続する。 ・ICTを積極的に活用することで、課題探究に対する意欲を高めると共に、思考力や表現力の育成を図る。 ・R80を活用して、自身の考えを論理的に記述したり表現したりするなど、言語活動の充実を図る。 ・TO学習を取り入れ、学習成果の確認や課題の克服を生徒同士で行うことにより、学習意欲を高めると共に、学びの中から豊かな人間性を育む。	A		社会的な見方・考え方を深めるために、さらなるアクティブ・ラーニング実践の可能性を追究する。
		自ら学ぶ生徒を養成するための工夫 ・課題提出や小テスト、家庭学習を充実させることにより基礎的・基本的な知識や技能の習得を図る。 ・課外授業や添削活動・模擬試験を有効活用する。	A		小テストや課外の内容や方法を見直し、より効果的な実践を追求する。
16 数学科	基礎・基本の定着とともに、論理力を高め、応用力の育成	生徒が考えればわかる、やれば解けると思えるように、アクティブ・ラーニングを踏まえた授業展開やICTを活用した説明方法を工夫する。	A	A	6年間の指導のあり方の確立 新テストに向けての対策
		年に何度かTO学習を実施し、下級生に教える経験を通して、基礎・基本の重要性を見直し、またその理解を深める。	B		TO学習を行う機会の増加
		定期的に課題を与え、家庭学習と充実させ、基礎・基本の定着を図る。	A		年次ごとに課題を精選し提示 小テストの実施
		定期テスト、実力テストの問題検討に十分時間をとり、基礎・基本の定着、論理力、応用力の育成までを目的とした問題を作成し、出題する。	A		年次担当者間で意見交換できる時間の十分な確保
		生徒の学力に応じて学習内容を精選し、深化的・発展的な内容の学習も行う。	A		入試問題や添削等、学習進度に合わせた提示
	学習意欲を喚起する指導の工夫	SSHの取り組みを踏まえ、他教科と協力して教科横断型の授業などの数学的活動の充実を図り、探究力・論理力の育成を目指す。	B		クロスカリキュラム授業の計画と開発
		課題や課題提示の仕方を工夫し、生徒たちの知的好奇心を喚起する。	A		到達度に応じた課題の提示 視覚教材の利用
		ICTを積極的に活用し、数学的な思考力・表現力の育成を目指す。	A		教員のICTに関するスキルアップ
	生徒の能力差をふまえ、個に応じた指導	きめ細かな指導をするため、習熟度別学習・少人数学習を工夫改善する。	A		少人数・習熟度授業の実施
		生徒の実態を把握し、個に応じた助言・指導が行えるようにする。	A		課外や追試、補習授業の実施

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
17 理科	基礎力の定着, 学力の向上	オリジナルプリントや小テストなどを活用して, 時間を効率的に使い, 演習時間などを多くとり, 基礎学力の徹底を図る。	A	A	より効果的な実践を図る。
		アクティブ・ラーニングやICT活用, TO学習等により生徒の主体的学習態度の育成を図る。	B		発達段階を意識した活用を計画的に行う。
	SSH第2期目の推進のため, つくばという立地を生かした授業研究	つくばの研究所や施設を利用した地域との連携, 筑波大学などとの高大連携により, 生徒の探究力・論理力の育成を図る	A		さらなる高大連携を推進する。
		ICTや外部講師を活用した出前授業等を研究する。	A		各年次の出前授業を体系化する。
	6年間の系統的なカリキュラムを実践・修正	SSHで開発してきたSS科目により, 高校教科書の一部を先取りして学習し, スパイラルをいかしたカリキュラムを実践し, 前期から後期への接続の体系化を図る。	A		6年間を見通した学力向上の指導のあり方を共有し, 円滑に進める。
		同じ科目を教える教科担当同士が密に連絡を取り合い, スムーズに接続できるようにする。	A		教員間でさらに情報交換を積極的に行う。
	生徒の学力を向上させ, 探究の過程を学ぶ効果的な学習法・指導法の開発	アクティブ・ラーニングやICT, TO学習等を取り入れた授業を相互に参観し, その指導法を教科会で共有することにより指導力の向上を図る。	B		情報交換を積極的に行い, 指導力向上を図る。
18 英語科	総合的なコミュニケーション能力の育成	言語の使用場面を考え, 4技能のバランスのとれた言語活動を行い, オーセンティックな題材や視聴覚教材を取り入れた授業を展開する。	A	A	・それぞれの技能のバランスに配慮する。
		授業導入時や展開時における日常会話や音声表現活動(自己表現活動)を実施する。	A		・実践的なコミュニケーションを意識する。
	基本的な英語力の構築	自主学習ノートの定期的な提出やこまめな小テストの実施・評価と共に, 効果的に生徒へフィードバックする。	A		・効果的な宿題の出し方や, 小テストの工夫。自学ノートの取り組みが作業ではなく, より学びにつながるよう改善。
		辞書の活用を奨励し, 語彙を増やすことを目的とした諸活動を実施する。	A		・導入時における辞書指導。
	英語を用いた言語活動を積極的に行える力の育成	プレゼンテーションやディベート活動といった発展的な言語活動を通して, 自分の意見をきちんと英語で表現できる力を養う。	A		・前期課程はスモールトーク, 後期課程はディベートを念頭に指導する。
		教科書だけでなく様々な補助資料を用いて異文化理解を進める。	A		・効果的な補助教材の選定。
	国際的な視野を広げる言語活動の構築	ALTや留学生とのコミュニケーション活動を通して, 様々な考えに触れる機会を設ける。	A		・ALTの効果的な活用。特に前期課程のALT参加は, 毎週か隔週かの検討が必要。
		インタラクティブフォーラムやスピーチコンテストなどに積極的に参加し, 意欲的に言語活動に取り組む機会を設ける。	A		・大会への参加を通して, より高度な英語力の育成を行う。
	6年間を見通した英語科としての指導形態の確立・発展	教科会や「ちょっと見週間」等を通して, 各年次における授業の検証と継承を行い, 並木英語科スタンダードを確立・発展させていく。	A		・常に6年間を意識した指導を行う。
		ディベート授業研究発表会の実施や公開授業等を通して, 本校での授業形態を外部にに向けても発信し, 県内の英語教育のリーダー的役割を担っていく。	A		・授業公開を通して, 並木英語科スタンダードの継承と発展。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
19 芸術科(音楽)	基礎的な能力を養う	表現活動に必要な知識と技能の定着を図る。	A	A	活動の中での基礎知識の定着を図れる授業の工夫。
		反復練習を重視し、表現に必要な技能や能力を養う。	A		少しづつ繰り返し行うことで達成感をもたせることのできる取り組み方の工夫。
	幅広い表現活動の充実	歌唱、器楽、鑑賞、創作それぞれの分野においてグループ学習を取り入れた活動を行う。	A		グループで教え合い考えながら表現活動を工夫できる活動を取り入れる。
		グループで意見交換の場を持ち、意図をもって表現したいことを意識した活動を重視する。	A		自分たちがどのように表現したいのか根拠を話し合うことができる授業の工夫。
	鑑賞教育の充実	音楽のみでなく、時代、歴史等にもふれ、幅広い観点から知覚する能力を養う。	A		その楽曲の歴史的背景や生い立ちに触れ、様々な観点から音楽を楽しめる授業の工夫。
		音楽の諸要素と、それが何を表現しているのか考えることのできる視点を養う。	A		音楽の諸要素から、作曲家が表現したいことをかんがえることのできる授業の工夫。
	創作活動の充実	基礎知識を用いて簡単な創作を行い、作って意図をもって表現する活動を行う。	B		作曲の時間を確保し、苦手意識をなくして楽しく作曲できる指導内容の工夫。
		音楽の構成や進行に従って作曲を行い、発表活動を行う。	B		発表活動の充実。
20 芸術科(美術)	基本的な美術の能力を育成	体験活動を充実させ、美術の基礎知識を身につける。	A	A	ICTを活用した授業展開やALを取り入れる。
		色彩の効果を考えて構想を練り、材料や用具の生かし方を考え、工夫してあらわすことを意識づける	A		色彩や技法を教材を用いて的確に教授する。
	柔軟な表現活動を育成	豊富な知識や表現方法を能動的に活用する喜びを養う。	A		夏休みを利用した美術館鑑賞。
		自他の価値観を認め、内面的なイメージを豊かに表現する力を持って表現活動する。	A		各課題終了後に講評会を開き、生徒と教師の意見を取り入れる。
	鑑賞活動の充実	自国の美術文化の特徴を理解し、優れた伝統美術に関心を持つ。	B		伝統的な日本美術から現代の漫画アニメ文化まで、日本美術を通史で学ぶ。
		作品や作家の言葉から美術の多様性に気づき、自分の表現に生かそうとする態度を養う。	A		古今東西のアーティストについて調べ学習し、自身の制作に取り入れる。
	美的体験を日常生活に生かす	実生活に活用できるような、情報やイメージを効果的に伝えるデザインする力を育てる。	A		自身の作品についてプレゼンテーションできるようにコンセプトを練れるよう、最初に文章やイラストで土台作りをする。
		絵画や彫刻・工芸などを暮らしに役立てる感覚を身につける。	B		美術館で鑑賞できるような芸術作品だけではなく、日常で見かける身近なアートについて紹介する。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
21 保健体育科	体力を高め、心身の調和的発達を図る。	授業及び体力テスト等への積極的参加姿勢を育成する。	A	A	体力テスト上位者を表彰、後期生では種目選択を導入
		体づくり運動の効果的な実践を行う。	A		体づくり運動で体力を高める運動の取り組み強化と、各種目の準備運動時に補強運動の導入
		自己の状況に応じて体力の向上を図る能力を育てる。	A		体力テストの結果を基に、自己の状況を把握させる。
	運動を豊かに実践することができるようにする。	運動の合理的な実践を通して、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする。	A		個々の能力に応じた運動で楽しめるルール作り
		幅広い基礎運動技能を修得させる。	A		前期生から多くの種目を経験させ、指導も教員の専門種目を生かした担当制を導入
		ルールを理解させる。	A		段階的な指導を継続し、ルールの定着を図る。
	スポーツマンシップの育成	規律ある行動をとる。	A		4月の授業時に全学年、集団行動を徹底して指導し年度のスタートをきる。
		あいさつを励行する。	B		授業開始・終了、ゲーム開始・終了時における挨拶の徹底
		マナー、ルールを遵守させる。	A		常に声かけを行い、フェアプレー精神を常に意識させる。
	保健学習の充実	心身の発達と心の健康について理解させる。	A		心身相関の理解
		健康と環境、障害の防止について理解させる。	A		ICT機器の活用や実習により、生徒の能動的な学習に結び付ける。
		健康な生活と病気の予防について理解させる。	A		各自の生活習慣や食習慣を改善し、規則正しい生活習慣を身に付けさせる。
22 技術・家庭科における技術分野	生徒の学習意欲を喚起する学習指導	他教科との関連を意識した授業展開から、生徒の知的好奇心を喚起する。	A	A	他教科との情報交換を積極的に行い、指導力向上を図る。
		グループ活動を取り入れ、自主性や協調性を伸ばすとともに、楽しい授業の実施を工夫する。	A		今年度の状況を継続する。
	科学的な理解と技術の習得	実習などの体験的な活動を通して、基本的な技術を習得する。	A		家庭科や時期を意識して単元構成をしていく。
		ワークシートや学習ノートを活用し、学習内容の定着を図る。	A		今年度の状況を継続する。
	生活に生かす力の育成	生活の場で生徒が取り組めることを意識した授業を展開する。	A		他校との情報交換を積極的に行い、指導力向上を図る。
		ワークシートや実習を通して、生活の場面を想定できるよう授業を展開する	A		他校との情報交換を積極的に行い、指導力向上を図る。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
23 家庭科	生徒の学習意欲を喚起する学習指導	生徒の興味・関心に応じ、知的好奇心を喚起する学習内容を工夫する。	A	A	科学的根拠や社会的・文化的背景なども取り扱う。
		実験や実習を効果的に行い、体験的に学べるようにする。	A		安全面に配慮する。
		グループ活動を取り入れ、自主性や協調性を伸ばすとともに、楽しい授業の実施を工夫する。	A		コミュニケーション力の涵養を意識する。
	科学的な理解と技術の習得	他教科との関連を図りつつ、生活を科学的にとらえる授業を展開する。	B		理科や社会、保健体育などとの関連を図るように努める。
		基礎的・基本的な技術を習得できるような実習を行う。	A		技術テスト等を取り入れ、技術力を高める。
	生活の場での実践力の育成	生活の中で、学んだことを生かす態度を育てる。	A		生活の場で実践できるよう、効果的なタイミングで課題を与える。
24 情報科	ICT活用及びコミュニケーション能力の育成	実習の中で基本的なビジネス用ソフトウェアを利用する。	A	A	現行通りで問題なし。
		情報の検索、加工、発信という基本的なICT活用プロセスを扱う。	A		現行通りで問題なし。
		グループワークや他とのコミュニケーションを重視した実習を行う。	B		グループワークの機会を増やす。
	情報倫理の育成	知的財産権について、いろいろな場面で扱う。	A		現行通りで問題なし。
		情報倫理について、自分で判断できるように指導する。	A		現行通りで問題なし。
		情報モラルを重視した指導を行う。	A		現行通りで問題なし。
	他教科や外部組織との連携	学校行事・課題探究とリンクした実習を取り入れる。	A		現行通りで問題なし。
		他教科や外部組織との連携をいろいろな場面で試みる。	A		現行通りで問題なし。
25 道徳	望ましい生活態度を身につけ、互いの個性を尊重し、自主的・自律的に行動しようとする態度を育成する。	年次や学級の生徒の状況を把握した上でその実態に応じた題材を提示することに努める。	A	A	年次の実態に応じた教材の選定と、展開の工夫。
		道徳の授業の中で考えたことが、学校生活のよりよい人間関係の構築や円滑な生活の維持に生かせることが実感できるようにする。	A		考えること、感じることを通じて、学校生活の中でも反映できるような言葉かけや展開の工夫。
		「道徳」「道徳プラス」の授業において、学級やグループ内で意見交換や話し合いの場を設け、他者の意見を基に自己の考えを深化できるようにする。	A		グループ活動で話し合い、考えをまとめることで、自己の考えを深め、今後の生き方にいかせるようにする。
		授業で考えたことを、従前の自己の生活や考え方と比較し、今後の生き方に反映できるようにまとめさせる。	A		生き方考え方について自己を振り返り、今後の自分自身の生き方の指針になるように考えさせる。
26 学級活動	学校全体や、各年次、各クラスで、生徒主体の活動の促進を図る。	生徒会主催の全校集会や、生徒主体の年次集会を開催し、生徒自らが積極的に企画運営できる能力を育てる。	A	A	修学旅行の事前学習など可能な限り、生徒に委ね、主体性を育む。
		学級での一人一役の実践と工夫を図る。	A		現状の指導を継続する。
	集団や社会の一員として望ましい人間関係を構築し、よりよい生活環境を築こうとする態度や自己を生かす力を養う。	校外学習等において、生徒主体の企画・運営をする能力を育てるとともに、集団の一員として望ましい人間関係を構築できる能力を培う。	A		現状の指導を継続する。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
27 総合的な学習の 時間	自分の興味あることについてのテーマを設定し、そのテーマに基づいて調べ学習を展開することで、情報収集能力や情報活用能力、考察力、プレゼン力を育成する。	「かえでツーリスト」というテーマのもと、自分の住んでいる地域を実際に歩いたり、調べたりなどして、地域再発見の機会を設け、情報収集能力や情報活用能力、プレゼンテーション能力(発表資料作成)を育成する。(1年)	A	A	年間を見通した計画と共に、短期計画も緻密に立案し、各時期ごとに進めるべきことを明確に提示できるようにしていく。
		「ミニ課題探究Ⅰ」において、世界の社会問題について調べ、テーマ設定能力や調べる力、調べたことから考察する力を育成する。(1年)	A		活動の意義をキャリア教育の目標と明確に関連付け、望ましい職業観や現時点での感想について考えたことを蓄積して捉えられるようにする(ポートフォリオの活用等)。
	テーマを追究し、課題を解決する課程において、課題発見能力、課題解決能力を育成する。また、自分の将来の夢や職業を意識し、進路実現にむけて行動する力を育成する。	つくばサイエンスフロントで科学に対する興味・関心をさらにもたせる。ミニ課題探究Ⅱにおいて、「身近な疑問を解決する」というテーマのもと、フィールドワークや実験・観察などを行う。研究論文やポスターの作成を通して、テーマ設定能力や探究の過程の手法を学び、分析力や表現力、論理力を育成する。(2年)	A		学部学科調べから始まり、Benesseの方を講師とした進路講演会、年次職員による進路集会、そして県内国立大学訪問と、年間を通して継続的に自分の進路と向き合う時間を設定してきたことにより、3年次のうちにやっておくべきことについて考えることができた。
		「キザニアかえで～将来の職業について考えよう～」というテーマのもと、自分に適した職業を知る活動や職業調べ、キャリアアトラクションの企画立案・実践を通して、自分の将来の夢や希望を意識し、実現にむけて行動する力を育成する。(2年)	A		平和研修で大テーマを設定したことで、平和研修での学びが深まり、探究意識も継続した。また、フィールドワークも外国人や老舗の店長など、外部の方へのインタビュー活動なども実施し、実践力、考察力、情報発信力を高めることができた。
	課題研究を通して、グループで学び合う力、テーマ設定能力、データを分析・考察する力を育成する。また、自分の将来や卒業後の進路に向けて行動する力を育成する。	「かえでユニバーシティ～卒業後の進路について考えよう～」というテーマのもと、大学の学部・学科を調べる活動や文化祭におけるキャリアアトラクションの企画立案・実践を通して、自分の将来や卒業後の進路に向けて行動する力を育成する。(3年)	A		6年間を見通した計画の中で、年次単位の行事を実施し、意識の向上を図る。
		「ミニ課題研究Ⅲ～地域の社会問題を解決しよう～」というテーマのもと、インタビュー、体験活動、フィールドワークやレポート作成を通して、グループで学び合う力、テーマ設定能力、データを分析・考察する力を育成する。(3年)	A		教室での授業だけには拘らない様々な体験活動を通じて、意識の向上を図る。
	6カ年教育における諸活動をととして、自らの生きる道を、主体性をもって選択し決断できる能力を育成する。	大学出前授業、進路講演会、文理選択説明会、大学見学会、卒業生との学習相談会などの進路学習を充実させ、進路に対する視野の拡張と難関大学への意識を高める。(4年)	A	A	6年間を見通した計画の中で、年次単位の行事を実施し、意識の向上を図る。
		道徳の授業を通して、職業観や生き方に対する意識を高める。(4年)	A		教室での授業だけには拘らない様々な体験活動を通じて、意識の向上を図る。
		「異文化理解と自己理解」というテーマで、ベトナムへの修学旅行をととして異文化理解と異文化から自国の文化を再確認する。(5年)	A		有意義な修学旅行となった。
		自己の進路について、多方面から情報を集めることで具体的な進路を見いだせるよう一助、そして、最終年次に向けて意欲の向上を図り、進路実現を目指す。(5年)	A		次年度も継続
		「進路実現と主体的な生き方の模索」というテーマで、進路情報の収集を進める一方、進路講演会などをととして、その都度自己を見つめ直す機会も設ける。(6年)	A		進路選択を通して自己実現の達成状況の把握を継続
		並木中等での6年間の総括をすべく、時期により作文やレポート作成を行い、振り返りと将来への展望を促す。(6年)	A		6年間の学校生活を土台とした将来への展望の把握を継続

※ 評価規準 A:十分達成できている B:達成できている C:概ね達成できている D:不十分である E:できていない